

会 議 記 録			
会 議 の 名 称	環境厚生常任委員会		会議場所 第3委員会室 担当職員 山末
日 時	令和元年5月28日(火曜日)		開 議 午後 1 時 30 分
			閉 議 午後 2 時 31 分
出席委員	◎富谷 ○並河 長澤 大塚 三宅 小松 平本 西口		
理事者 出席者			
事務局	鈴木議事調査係長、山末主査		
傍聴者	市民 1名	報道関係者 0名	議員1名(福井)

会 議 の 概 要

1 開 議

2 行政視察の総括について

<富谷委員長>

5月20日～22日に実施した行政視察について、各委員から感想及び意見をいただきたい。まずは大崎町について、順に意見を求める。

<三宅委員>

生ごみの分別は、すぐにでも取り組んだ方がよいのではないかと感じた。また、設備は必要になるが、剪定や伐採した木を分別していくことにより、大幅にごみが減っていくのではないかと思った。

<長澤委員>

焼却処理施設がないという条件の中で、内部から努力されたということや衛生自治会の役割が興味深かった。行政と民間会社との連携・協力がうまくできたことにより実現したものだと思った。

<平本委員>

焼却処理施設を持たずにごみ処理を行っていることに驚いた。人口が少ないこともあり、住民のコンセンサスを獲得過程がスムーズにいったと思う。既に亀岡市もある程度の分別を行っているので、住民の理解と協力をもう少し得ることができれば、不可能な取り組みではないと思った。志布志市もそうだが、トップダウンで取り組んだわけではなく、担当課が危機感を持って取り組んでいった結果であったということで、職員の熱意が感じられた。亀岡市職員も同じように意気込みをもってやってもらえれば、ごみ処理だけでなく、いろいろなことが前向きに進んでいくのではないかと思った。大崎町や志布志市の職員に亀岡市まで出向いていただき、職員同士で意見交換をしてはどうかと思った。

<西口委員>

27品目の分別を実施するに当たり、自治会とは異なる組織である衛生自治会を組織して取り組んでいるところが参考になった。紙おむつの再資源化を亀岡市でもやっていくことができればよいと思った。視察内容とは異なるが、ポイ捨て防止条例

が抑止力となり、ポイ捨てが減っているということであった。プラスチックごみゼロ宣言を行っている亀岡市においても、今年中に条例を制定していかなければならないと感じた。また、今回の視察先のように先進的な取り組みを行っている自治体の職員に亀岡市まで来てもらい、話をしてもらえば多くの職員に話を聞いてもらえる。こうした取り組みができればよいと思う。

<大塚委員>

大崎町では職員の中に「レジェンド」と呼ばれる強いリーダーシップを持っている職員がいたという話があった。亀岡市においても、今後、分別を進めていくに当たり、そういう職員がいれば大きな力になると思う。また、木の枝等をチップにして生ごみと混ぜて堆肥にするということだったが、土づくりセンターの敷地の一角を上手く活用して堆肥をつくる場所をつくっていければよいと思った。

<小松委員>

担当者が熱心な職員であり、説明が長かったため、質問時間があまりとれなかったのが残念だった。取り組みを進めていく中で、議会はどのような役割をもっていたのかということや自治体と衛生自治会は具体的にどのように違うのかということを知ることができなかった。亀岡市で導入するのであれば、一度に全域で取り組むのではなく、モデル地区をつくりながらやっていく形になるのではないかと思った。また、取り組みに至るまでの説明会を450回開催したということであり、これが一番大事なのではないかと思った。分別を行うのは市民なので、理解・協力を得なければならぬ。亀岡市で導入したとしても、それができるのかを考えていかなければならないと感じた。

<西口委員>

当日に質問できなかった分については、事務局を通して質問してはどうか。

<富谷委員長>

質問項目をまとめていただければ事務局を通して相手先に送付する。

<並河副委員長>

大崎町はリサイクル率が82%に達し、それにより雇用が生まれ、循環型の奨学金も創設された。また、海外に目を向け、インドネシアで指導を行ったということもあり、いろいろなところ広がっているのが面白いと思った。ふるさと納税が平成27年に日本一になった町でもある。自分のまちへの郷土愛があり、ごみの分別も協力していくような風土もあるのではないかと感じた。

<富谷委員長>

衛生自治会の存在も大きいと思ったが、地元への説明会を行う中で、地元の人が集まるのであれば朝の6時半でも夜でも説明に行くというような話もあり、素晴らしい取り組みだと思った。企業と行政と住民が三位一体で循環社会を構築していると感じた。ごみ出し困難者に対する支援も亀岡市にとって参考になる取り組みであった。次に、志布志市について、順に意見をいただきたい。

<三宅委員>

志布志市は市民が中心となって取り組んでいた。シルバー人材センター等を上手く活用しているのではないかと感じた。また、マイロードクリーン大作戦は亀岡でもできることだと思う。粗大ごみのリユース販売もよい取り組みであると思った。ごみ出し困難者支援事業についても亀岡市で実施できるのではないかと感じた。

<長澤委員>

大崎町と共通する部分が多いが、分別をする時に住民同士で教え合ったり、指導員が出向いたりしており、住民のつながりが密接な地域ではそういったことが可能な

のではないかと思った。紙おむつの再資源化については、専門のメーカーであるユニチャームの協力を得ているところに注目した。ポイ捨ての防止についても、どのように取り組んでいくのかを考えていくべきだと思う。また、日常の業務と並行し、内部から改革が発案されるのをどのように導き出していくのかというところが組織にとって大事なことではないかと感じた。

<平本委員>

回収したごみはほぼ適正に処分ができていると感じた。ポイ捨ての禁止・防止についての意見があったが、適正に処理されないごみがプラスチックごみの最も大きな課題である。志布志市では、ポイ捨て防止条例を制定したことにより、7割のポイ捨てが減ったということであった。本市においても早く条例制定等を行っていくべきだと思う。

<西口委員>

志布志市と大崎町は、他の地域とは比較にならないぐらいの高いレベルで取り組まれていた。ごみ出し困難者に対する支援はすばらしい取り組みだと感じた。ポイ捨て禁止の看板も抑止力になるということであったのが印象的であった。亀岡市でも条例を制定しなければならないと思う。

<大塚委員>

ごみ袋に名前を書いて出すというところに市民の意識の高さを感じた。亀岡市でも同じようにした場合にどうなるのかということが非常に興味深い。平成21年10月からポイ捨て防止条例を施行しているが、たまたま志布志市議会の議会だよりを見てみると、条例を制定して10年が経過するが、あまり効果が見られないという議員の発言があった。亀岡市でも条例は制定すべきと考えるが、効率的に運用できる手法を考えていく必要があると思う。

<小松委員>

大崎町のポイ捨て防止条例では紙くずやレジ袋等が具体的に明記されていた。志布志市には書かれていなかったが、レジ袋ということを具体的に条例に明記すべきであると感じた。レジ袋有料化の検討を行ったが、大手のスーパーの理解を得られなかったために頓挫したという説明があり、それについてももう少し詳しく聞きたかった。

<並河副委員長>

生ごみを利用してひまわり油をつくる取り組みが印象に残った。紙おむつの再資源化は、高齢者の増加により、今後必要性が増していくものだと感じた。志布志モデルの取り組みが海を渡って海外にも広がっており、すごい取り組みだと思った。

<富谷委員長>

ごみ袋に名前を書くことについて、亀岡市においても、自治会でごみ袋に名前を書くよう啓発しているが、全然書いてもらえないのが実情だと思う。志布志市では、名前の書いていないものは回収しないということを周知しているとのことであり、それも1つの方法だと思った。亀岡市の一人当たりの年間ごみ処理経費は9,690円だが、分別を細かく行っている志布志市では11,245円かかっているということで、コストが多くかかるということもわかった。担当課に聞いていると剪定した枝や葉っぱの堆肥化を行うだけでもコスト減につながるという話があった。次に、いちき串木野市について、それぞれ感想をいただきたい。

<三宅委員>

亀岡市も新電力会社を始めているが、説明を聞いて、簡単にはいかないものだと感じた。ガスや電力、携帯電話の会社も電力事業を行っており、その中で契約者数を

増やすことは困難であると考えている。公共施設の契約先を切り替えるだけで黒字になっているという想像がつくが、一般家庭の契約はまだ少ない。今の状態ではなかなか厳しいと感じた。ただし、公民館に対する補助や子育て世帯に対する補助は非常に大きいと感じた。

<長澤委員>

はぐくみ応援プランは、子育て支援の担当部署から提案があったわけではないが、検討を行う中で結果的にそういうプランができたということに興味を持った。新電力会社が普及していくと九州電力がさらに値下げを行ったりするが、それは結果的には市民のためになっているという齊藤議長の質疑があり、興味深かった。

<平本委員>

いかに安価に電力を確保するのが課題であるということであった。ふるさとエナジー株式会社についてもこれから同じような課題が出てくると思う。そういうことを想定した中で取り組んでいくことが必要なのではないかと思った。子育て世代に対する補助については、移住・定住までは結びついてはいないものの、多くの子育て世代が利用されているということだったので、行政の負担にならないのであればよい取り組みであると思った。

<西口委員>

原価の変動により、事業が継続できるのか疑問に感じた。子育て支援は市民から喜んでもらえているようであり、成果が上がっていると思った。

<大塚委員>

いちき串木野市は芋焼酎の産地なので、焼酎をつくる際の芋の搾りかすを利用してバイオマス発電を行っている。亀岡市も汚泥を利用してバイオマス発電を行っており、似たようなことを行っていると思った。地域によっていろいろな方法で事業を行っていることがわかり、興味深かった。

<小松委員>

いちき串木野市は一般家庭向けの契約も進めているが、あまり熱意を感じなかった。市役所に来てもらって手続きをするということだったが、一般家庭向けの契約を拡充する気持ちがあればもっと違う発想ができるのではないかと感じた。亀岡市においても、今後、市民の理解を得ていかなければならないので、参考にしながら進めていっていただきたいと思った。

<並河副委員長>

公共施設等の電力を生み出しながら徐々に拡大していくという方法が全国的に広がっている。いろいろな課題があると思うが、研究をしていながら拡大できる方法を検討していけばよいと思った。子育て世代への補助もよい取り組みだと思った。

<富谷委員長>

亀岡ふるさとエナジー株式会社は設立から1年が経過したところであり、最終的には民間に電力を供給したいと考えているようであるので、今後の参考としたい。本日の意見や各委員から提出いただく視察レポートを踏まえ、正副委員長で視察報告書を作成する。

～ 14 : 21

3 その他

<富谷委員長>

次回の委員会は6月18日（火）午前10時から議案審査を行う。

<平本委員>

本日付けの京都新聞で火葬場の報道がなされていた。当委員会では、余部町丸山で進めていきたいという説明はあったが、余部町丸山で決定したという話は聞いていない。新聞記事が正しいければ、余部町丸山で決定したという内容なので、そうであれば決定したという報告を事前に受けるべきだと思う。正副委員長にも記事が掲載されるという情報が入っていなかったということなので、それはどうなのかと思っている。担当部の説明をいただきたいと思う。

<議事調査係長>

担当部に事情を確認したところ、5月8日の常任委員会での行政報告においては、審議会からの答申を受け、基本計画に基づいて余部町丸山を建設予定地として進めていくという意図で説明を行ったということであった。必要であれば改めて説明を行うということである。これを踏まえて協議願いたい。

<平本委員>

整備計画に基づいて進めていくという話は聞いている。万が一の場合は移ることもあるのかという齊藤議長の質疑もあったと思う。それに対する答弁では、余部町丸山で進めるというはっきりとした答弁はなかったように記憶している。担当部は決定のつもりで説明をしたのかもしれないが、余部町丸山で決定ということを正式に聞いた記憶はない。他の委員の意見をいただきたい。

<西口委員>

余部町丸山で進めていくという認識をしているが、再度説明を求めたいということであれば説明を求めればよいと思う。

<並河副委員長>

地質調査の結果、建設が適切でないということになればやめるのかという質問に対しては、考えるというような答弁であったと思う。私は余部町丸山で進めるものと思っていたが、決定的な話ではなかったような記憶もあるので、再度確認してはどうかと思う。

<長澤委員>

説明を受ければよいと思う。どこからが決定というのかが難しいと思うが、審議会の答申を受けて亀岡市の計画を策定したということであった。齊藤議長から、地質調査の結果によっては見直しもあるのかという質問に対しては、事前に調査も行っているの見直しはないだろうと考えているというようなニュアンスでは話をされていたが、新聞ではこれで本当に決まってしまったという印象を受けかねないので、説明を受ければよいと思う。

<平本委員>

補足だが、火葬場について異論があるわけではない。所管の委員会に対して決定の報告さえあればよかった。最近、新聞記事で決定というようなことを見る機会が多いように思う。

<富谷委員長>

次回の委員会で説明を求めることとする。

散会 ～14:31